

●水環境・湖沼(3) (1-B-14-1～1-B-15-2)

本セッションでは、湖沼環境にかかわる発表が6件あった。

1-B-14-1は、バクテリアの酸素利用速度を利用した $\text{PO}_4\text{-P}$ の測定方法を発表したもので、従来の測定方法より低濃度の $\text{PO}_4\text{-P}$ の測定を試み、酸素利用速度から算定した $\text{PO}_4\text{-P}$ 濃度をモリブデン青吸光光度法と比較検討し、 0.0006mg/L までの $\text{PO}_4\text{-P}$ が測定可能としている。化学薬品を使用しない測定方法であるが、生物を利用した測定は不安定な要素も多く、今後、さらに測定方法を精査されることを期待する。

1-B-14-2はボディシヤンプーに含まれるモノアルキルリン酸塩(MAP)の分解について発表したもので、手賀沼の水を使い実験室内でMAPの分解過程を調査し、 $\text{PO}_4\text{-P/T-P}$ 比の経時変化を求めている。質問にも出たが、ボディシヤンプー由来のリンが手賀沼へのリン供給に占める割合は小さく、大きなリン供給源を対象として調査を進めることが望まれる。

1-B-14-3は霞ヶ浦のコイ養殖漁場付近の底泥の溶出試験の結果を報告したものである。嫌気および好気条件で実験した結果、窒素の溶出については養殖漁場と他の部分での大きな差は無く、リンは養殖漁場での溶出速度が大きいという結果を述べている。質疑応答で、養殖漁場の底泥が霞ヶ浦のリン濃度に与える影響は小さいとの答えがあったが、今後、影響を数値化して評価されることを期待したい。

1-B-14-4は曝気循環装置を設置した小規模のため池の底質を、装置が設置されていないため池の底質と比較調査した結果の報告である。曝気循環装置は通年運転ではなく、運転時と停止時の比較の必要性を感じた。今後、調査を継続されることを望む。

1-B-15-1はハノイTay湖の底質中の重金属に着目して調査した結果の報告である。湖内の4地点でコアサンプルを採取し、深度方向の重金属の分布を分析しており、水質を過去にさかのぼって推定できる結果となっている。市街地からの下水流入部において、重金属濃度が最も高いという結果から、市街地排水の影響が大きいことを示唆している。今後は、底質と水質の関係の明確化が望まれる。

1-B-15-2は水源ダムでの藍藻類・放射菌などの季節変動とカビ臭発生との関係解析の発表である。実験期間は例年と違い藍藻類がほとんど確認されなかったため、今後、調査分析を継続し、藍藻類の存在下での解析を期待する。

(首都大学東京大学院・都市環境科学研究科 山崎 公子)